戦争、原爆、平和

～広島の記憶～

2003年度 ガールスカウト東京都第４団
シニア部門

「戦争、原爆、平和　～広島の記憶～」

発行：
2003年度 ガールスカウト東京都第４団 シニア部門

発行日：
2004年６月13日

作成：
春キャンプ参加 スカウト：
笠川 奈美　小内 一子　段木 真魚　矢島 麻友子
山岸 早李　多田 暁　瀬川 紫穂　平野 梨沙

シニアリーダー：
中谷 純子　池田 美和子　押田 聡美　来代 なつき
中田 信子（編集）　古谷 久代（文）

協力：
山岡ミチコさん
谷本さんご一家
中奥さん
シニアスカウト保護者の皆様
霊南坂教会

はじめに

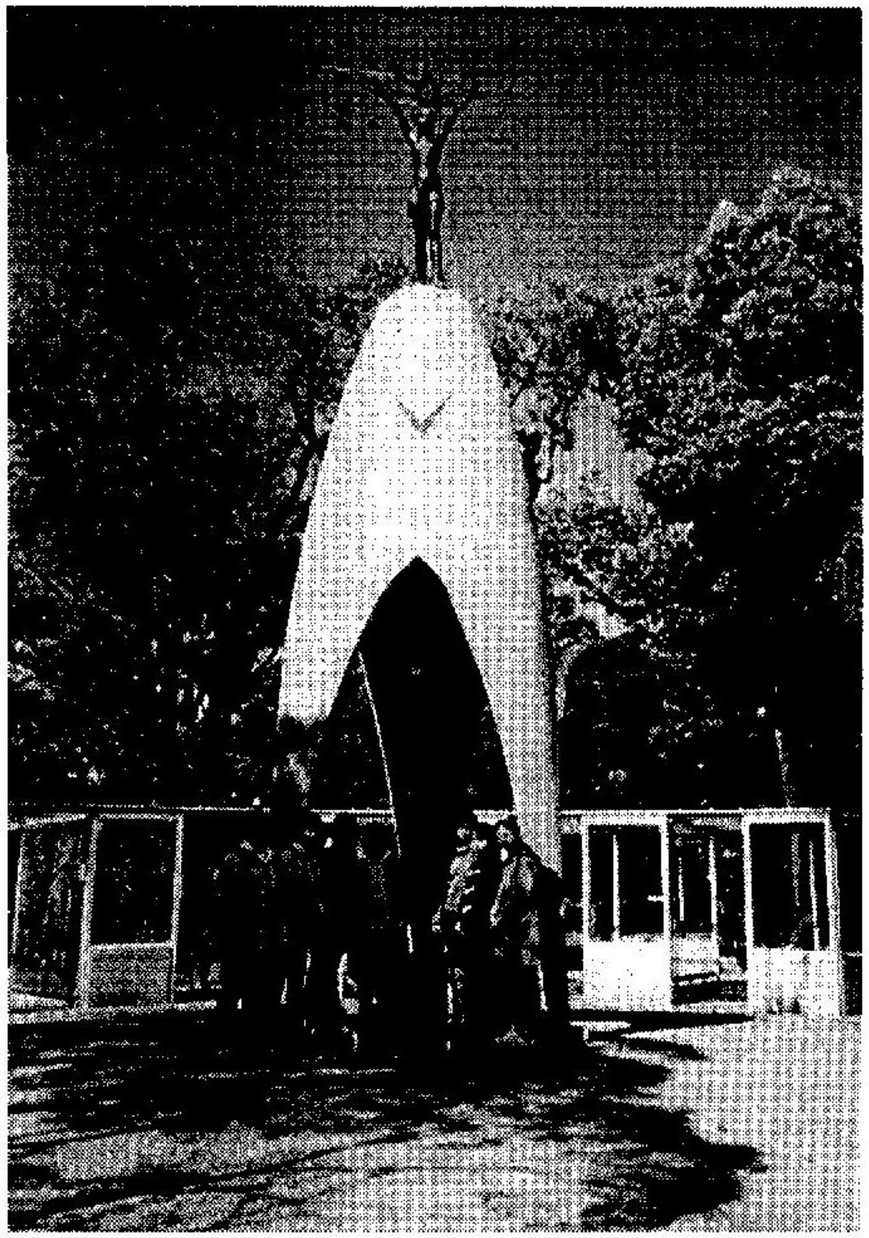
2003年度のシニア部門の集会は、「平和」を大きな目標として、スタートしました。年度初めに今スカウトが気になっている事を様々に書き連ねた中に、「戦争」「難民」「いじめ」等の文字が多くあり、又、広島の原爆資料館を見学したいという意見もありました。これは4月当時、アメリカがイラクに対し戦争を始めた事も影響していたと思います。少し難しいけれど、集会の中で様々な角度から「平和」を考えてみることにしました。夏のキャンプでは「難民」体験をし、秋には「アフガニスタンの写真展と講演」を聴きました。そして春キャンプに広島を訪ねる事にしたのです。以下はそのときの記録です。

これはお話を伺った山岡さん（見学コースでの話を含めての話を出来るだけ再現するように書いたものです。しかし、録音をしていた訳でないので、違うところがあるかも知れません。ご了承ください。

原爆ドーム

世界遺産として保存が決められているこの建物は「広島の物産を広めるための建物」としてチェコの人が設計したものです。鉄骨とレンガで出来た建物の中央に階段部分のドームがあり、さぞモダンな外観であったことが想像されます。放射能のため、もろくなったレンガの壁は、これ以上落ちないよう補修されています。周りのガレキもそのまつに保存されています。ここから約 160m 東南に行ったところに爆心地があります。そこは島病院という病院の上でした。ぶあついレンガの壁が一瞬にしてくずれたとは、その破壊力のすごさが判ります（山岡さんがドームの写真を撮るのに一番のポイントを教えて下さいました。皆で記念撮影しました）。

原爆ドームの横には、平和記念公園との間に元安川という川が流れていています。広島は川の多い街で、平和記念公園は川が丁度 2 つに分かれた中州になっている所にあって、その頂点には、相生橋があります。原爆の投下目標は、この橋の上だったそうです。川のほとりは、今はきれいに整備され、桜が丁度見頃を迎えていました。当時はこの川の中に沢山の死体が浮いていて、川の水も放射能で汚染されていたそうです。



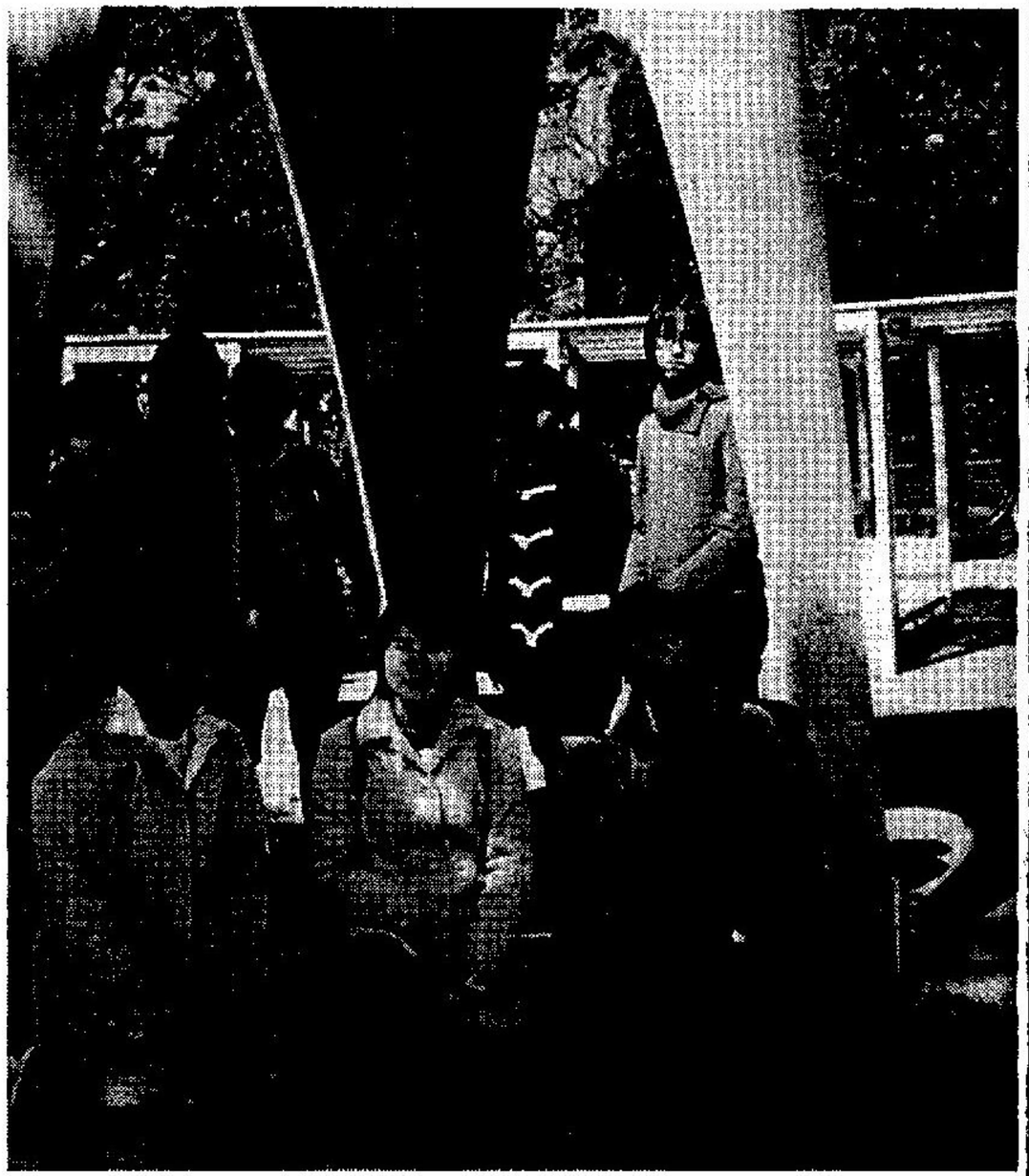
動員学徒慰霊塔

戦争末期、国のために中学生も様々な仕事にかり出されました。学生といっても勉強はほとんどできなくて、毎日女子は軍服を作ったり、煙草を作ったりの仕事を男子は力仕事をしていました。男子は軍人と同じカーキ色の服を着ていたので、軍人と間違えられて攻撃されたこともあるそうです。この動員学徒慰霊塔は広島だけでなく、全国で戦争のためにかり出されて亡くなった、学生さんのために作られました。シンボル塔と学生の働く様子が石に彫られた礎（いしずえ）があります。その裏には協力させられた全国の学校の名がきざまれていました。「あっ！知ってる学校がある！」と言ったスカウトもいました。

山岡さん達は、月に２回この回りを清掃し、法要をしているそうです。

(平和記念講演へ行くのに元安橋を渡ります。ここの欄干※1は、被爆当時のものだそうです。広島は近くに石の産地があったため石の橋が多くあり、そのため残ったそうです)

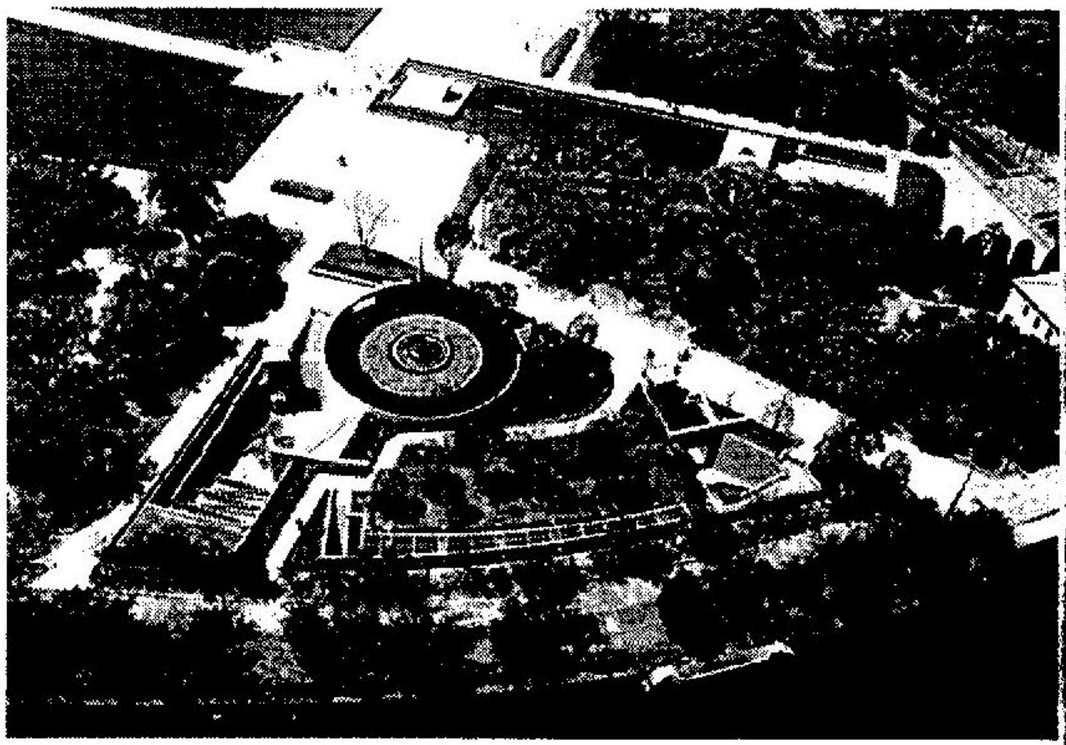
※1　欄干
橋・縁側などのふちに、人が落ちないように縦横にわたした木。また、飾りとして設けたもの。てすり。おばしま。
[株式会社岩波書店　岩波国語辞典第六版]



原爆の子の像

2才のときに被爆をした禎子さんは、元気に成長していたのですが、小学6年になった時、突然原爆の後遺症で発病しました。彼女は毎日飲む薬の包み紙で鶴を折りながら、これが千羽になれば私の病気は良くなると思い続けていたそうです。残念ながら鶴は千羽にならないうちに禎子さんは亡くなりました。彼女の友達はそれを知って、禎子さんのために慰霊碑を作ろうと全国へ呼びかけて、この原爆の子の像が出来ました。今でも全国から千羽鶴を持ってここを訪れる人がたえません。

(亡くなった千羽鶴は、市庁の体育館のような部屋に置いてあるそうです。「もっと良い方法があるのでは…」と山岡さんは残念そうでした)



韓国人原爆犠牲者慰霊碑

原爆供養塔から、振り返った場所にこの礎（いしずえ）はあります。韓国で守り神とされている亀の上に碑がのっています。7年前迄は向かいの本川をはさんだ反対側にあったそうです。日本にいろいろな事情で来ていて、同じように原爆の被害にあわれた韓国の人も大勢いるのです。

平和記念公園は当時の地面の上に厚く盛り土をして出来ているそうです。それは、あまりに多くのものが焼け、全部を取り出せないので、そのままにして土をかぶせたからです。まだまだ多くの遺骨もあるはずだそうです。

浅野家の墓のあった所だけが当時の地面の高さのままで保存してありましたが、盛り土の厚さは50cm程、大きな石塔が傾いたり、落ちたりしています。

（しばらく公園の中を歩きました。川のほとりでは花見をする人が三々五々。バンドのメンバーが路上パフォーマンスをしている音も聞こえてきます）

原爆供養塔

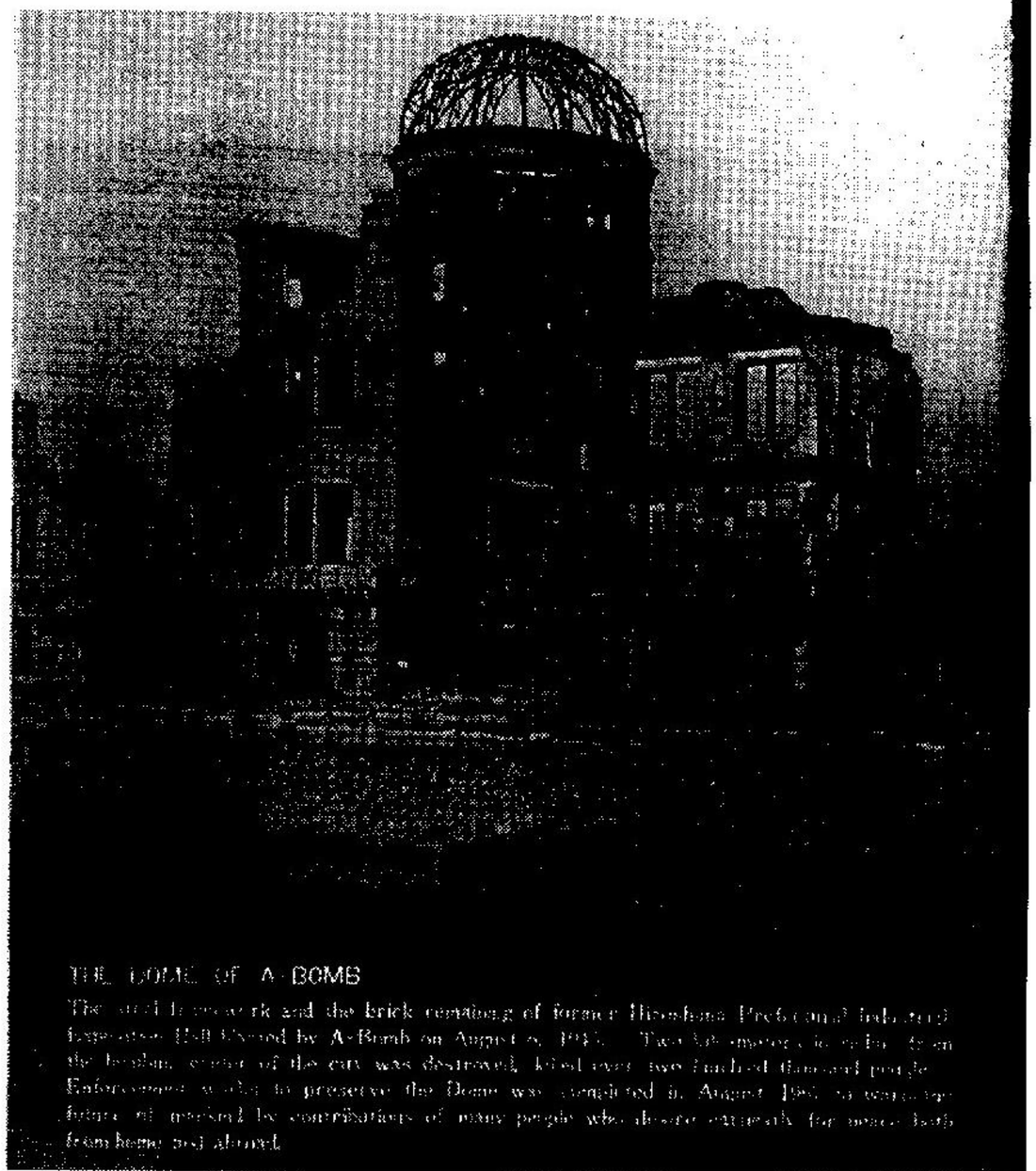
石のモニュメントが多い中で、ここだけはまるで古墳のように土が盛られ、芝生でおおわれています。この中には、亡くなられた時に名札等で名前のわかった方の遺骨が2万。名前がわからなくて、みかん箱に一緒に入れられているものが15箱分もあるそうです。毎年8月6日の午前7時45分から慰霊が行われているそうです。(8時15分からは原爆死没者慰霊碑で行事があるため)

レストハウス

元は呉服店だったこの場所で一休み。アンケートを書いて、絵はがきをもらった人もいます。

平和記念資料館

(私たちが原爆資料館と呼んでいる建物です。山岡さんはここの地下に私たちのために部屋をとっておいてくださいました。そこで山岡さんは、ご自分の体験を次のように語ってくださいました)



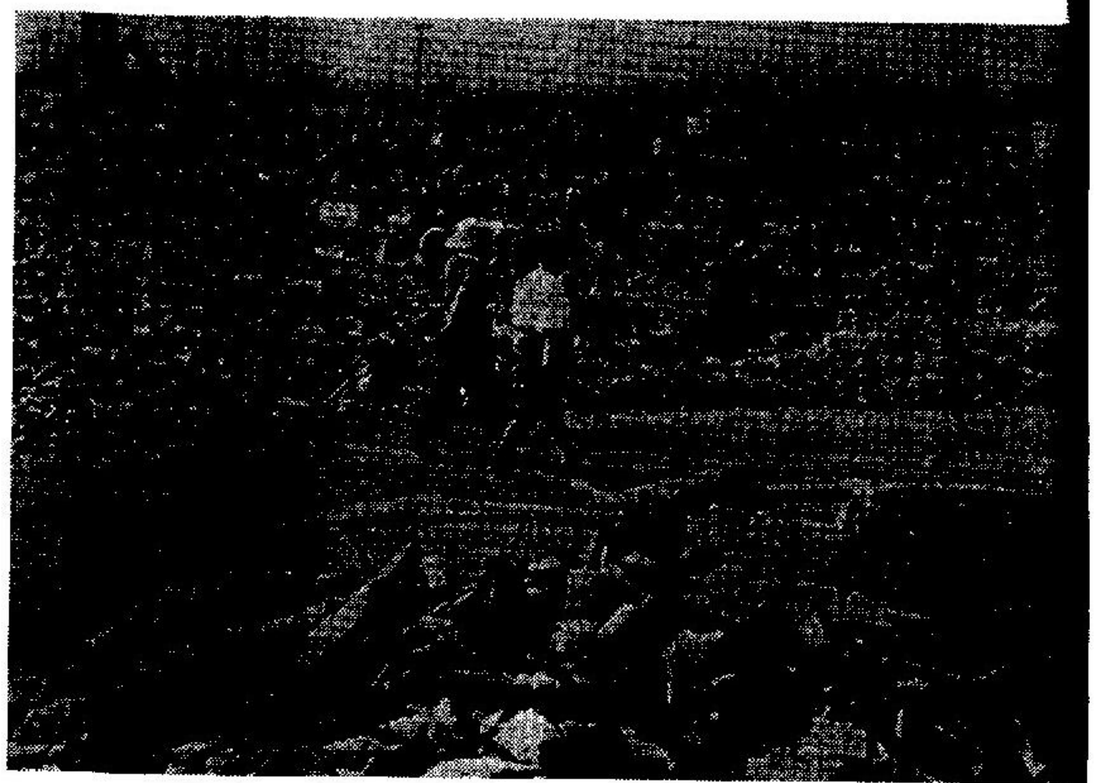
山岡ミチコさんの話

（山岡ミチコさんは、25年前にお母様が亡くなられるまでは、ご自分のつらい体験を人に語ろうとはしなかったそうです）

私が被爆体験を話し始めたのは、私のお母さんが25年前に亡くなってからです。お母さんを焼いたお骨の中にガラスの破片があったのです。何かと思ってお医者さんに尋ねました。私のお母さんは腕が少し曲がっていたのですが、それはこのガラスの破片が入っていたからだったのです。原爆が落とされたとき、お母さんの腕にささったのだけどガラスを取るには腕を切らないといけない。「娘を育てるのに腕がなくては困るから」と、そのままにしていたのだと知りました。私はそのことを私のお母さんが亡くなるまで知らなかった。随分痛かったと思うけど、お母さんは私を育てるためにず～っと黙っていたんだネ。それを知って、私は自分の体験を皆に話さないで死んではダメだと思った。私のこの辛さや苦しさは、私が死んで、初めて消える。それまではず～っと持っていなくてはいけない。そして皆に戦争がどんなものか話しておくことが大切だと思いました。

（山岡さんは中学3年のときに被爆しました。原爆によって何もかも失い、人生がガラリと変わってしまったのです）

広島になぜ原爆が落とされたかというと、広島は第5師団という大きな軍隊があり、司令塔が原爆ドームの反対側、今

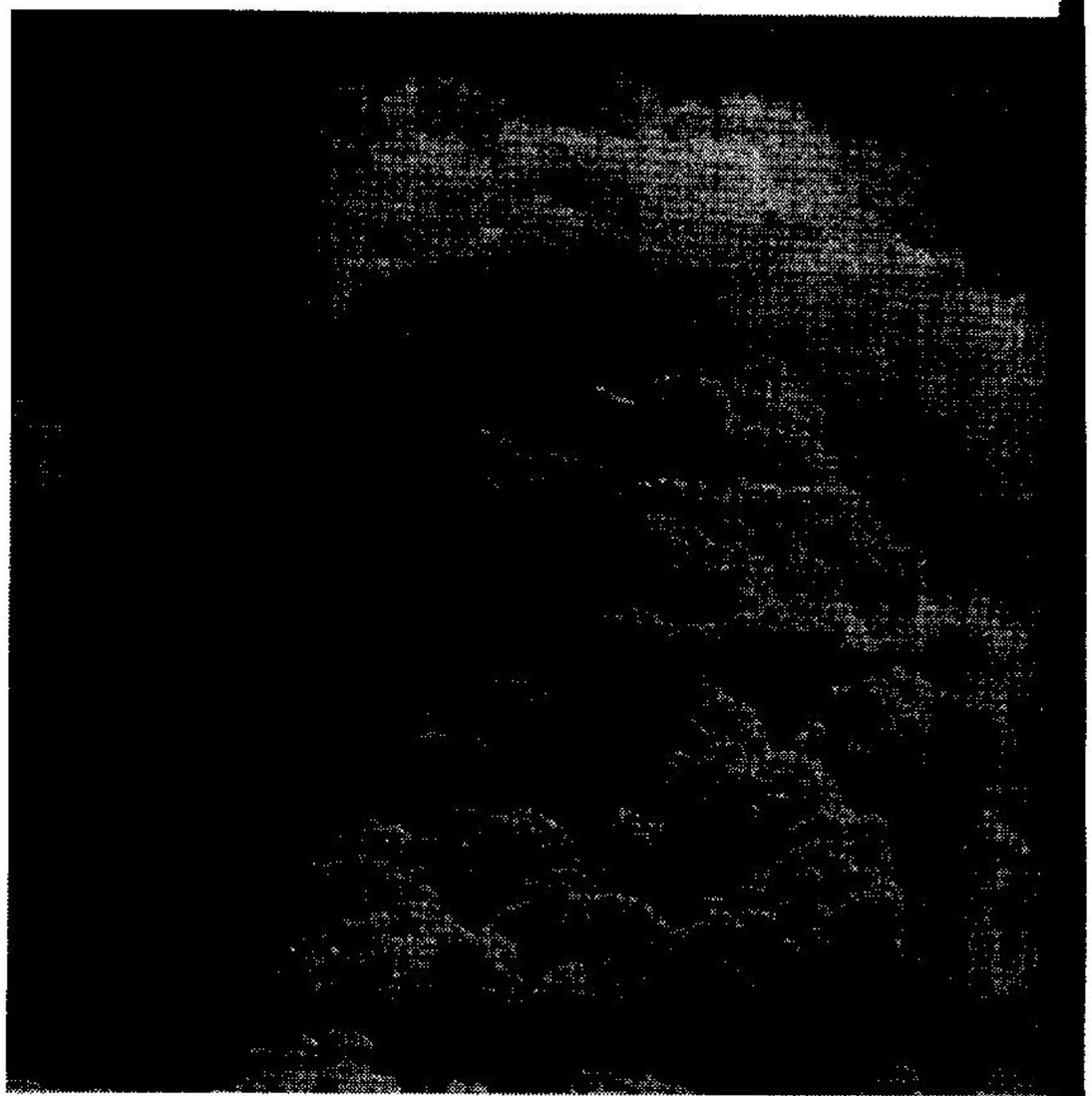


の跡場にあたる所にあったのです。それに広島の町は、三方が山に囲まれていて、真ん中に爆弾を落とすと丁度威力が試される大きさだったのです。

アメリカは少しでも早く戦争を止めるために、また開発中の核兵器を使って世界に力を示すために、原爆を使うことを考えたのです。でもなかなか出来上がらないので、3月東京、4月沖縄5月名古屋というように攻撃をしながら原爆が完成するのを待っていたのです。6月にようやく3個の原爆が出来たので、1個をアメリカのネバダ州で実験に使った後、当時のトルーマン大統領の命令で1945年8月3日以降、相生橋に落とすと決めたのです。どこに落とすか色々と候補はあったのですが、前に述べた理由で広島に決まったのです。当時の広島の人口は35万人でした（現在131万人）。

広島はそれ迄、一度も爆撃を受けたことがありません。だから、広島の空の上を通過する飛行機を見ても、誰も怖いとは思っていなかったのです。

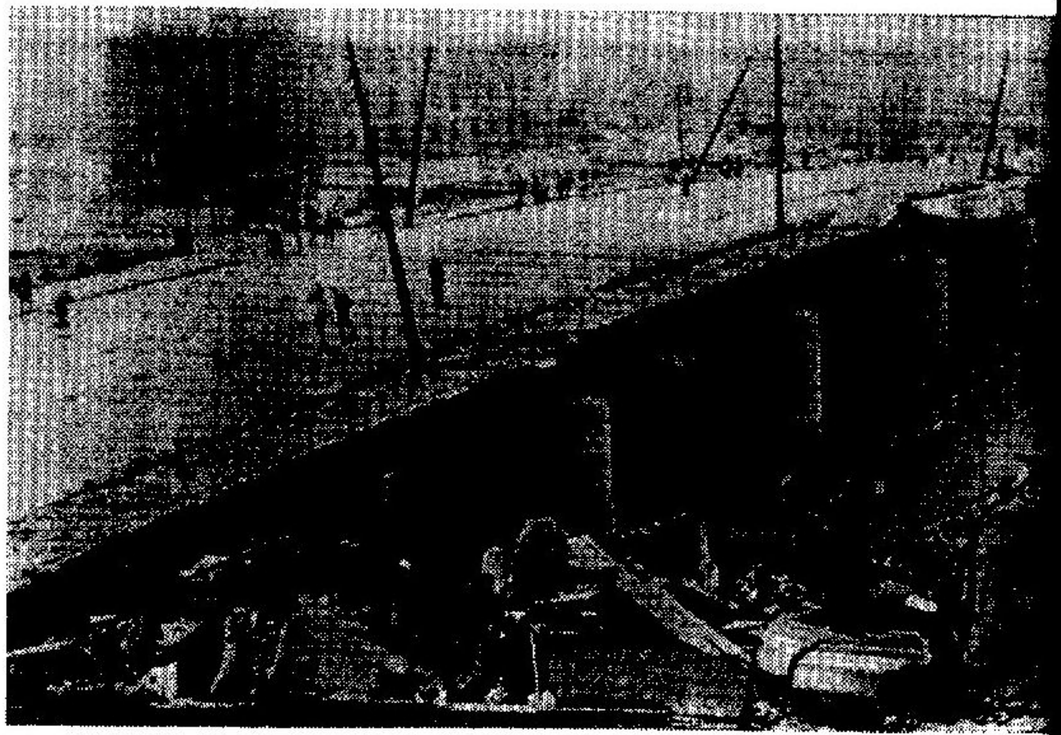
8月5日の夜はいつもより沢山、爆撃戦が広島の空を飛んで行きました。灯火管制の中でも、家の中から飛行機の灯を見つめて、きれいだと喜んだりしていました。朝になってようやく空襲解除になったので、いつものように広島の人達は、学校や職場に向かいました。



その時、急に飛行機が一機飛んできたのです。私はその頃、学徒動員で電話交換手として、働いていました。白いブラウスにもんぺをはいて、ふかし芋を2つ持って、出掛けたのです。

婦心地から500mの所にあった電話局まで歩いていたとき、急に目の前がピカッと光りました。眩しい光で黄色と青の色だったのを覚えています。ピカッと光ってドーンとものすごい音がしました。何が起こったのかわからなかったけれど、私の顔が一瞬プーっとふくれたのを感じました。あとで、それはヤケドで一瞬のうちに水ぶくれが出来たとわかったけれど、そのときはわからなかった。耳も片方は聞こえません。私の声が大きいのはそのためです。

気がつくと私は足の先だけ外に出ていて、あとはガレキに埋っていました。物の焼ける匂いや、人のうめき声が聞こえてきます。私は足だけしか出ていないので声を出さないと誰も気づいてくれないと思って、声を出し続けていました。私のお母さんは私の事を心配して、私を捜しに来てくれました。そして私を見つけてくれたのです。お母さんて偉いね。私の足と声だけ聞いて、私を見つけてくれたんだよ。お母さんが見つけてくれなかったら、私は今、こうして皆に話をする事も出来なかったんだよ。お母さんてありがたいネ。



私達は街が火事になっているので、山に逃げました。そこで、会った友達に声をかけたのに、友達は私の事がわからないのです。何度か声をかけたら「あ～山岡さん」と言ってくれた。私の顔はヤケドで誰だかわからないくらいになっていたのです。逃げる途中で大勢の人を見ました。幽霊のように見える人がいました。沢山の死体が川に落ちていて、川は人でいっぱいだった。皆熱くて、川のあるところに行ったのです。「水をください」と全身やけどの体で頼んでいる人もいた。この世の地獄だった。お腹の中のものが飛び出している人もいたのです。

「水をください」と言って水を沢山飲んだ人は、下痢をして中のものを全部出したから生きられたけど、少ししか飲まなかった人は放射能が体に廻って早く死んでしまった人もいるようです。

私がいた所には大勢の人が集っていたのですが、毎日毎日大勢の人が死んでいきます。死体が山のようになりました。人が死ぬと、傷口からウジが湧きます。ウジが体中湧いて真白になるそうです。だまっていて動かなくなると、もうすぐ死ぬと判断されて、死体の山に放り込まれるので、私はずっと声を出していました。命は助かったけれど、顔にやけどをした山岡さんは、随分と人からいじめられました。

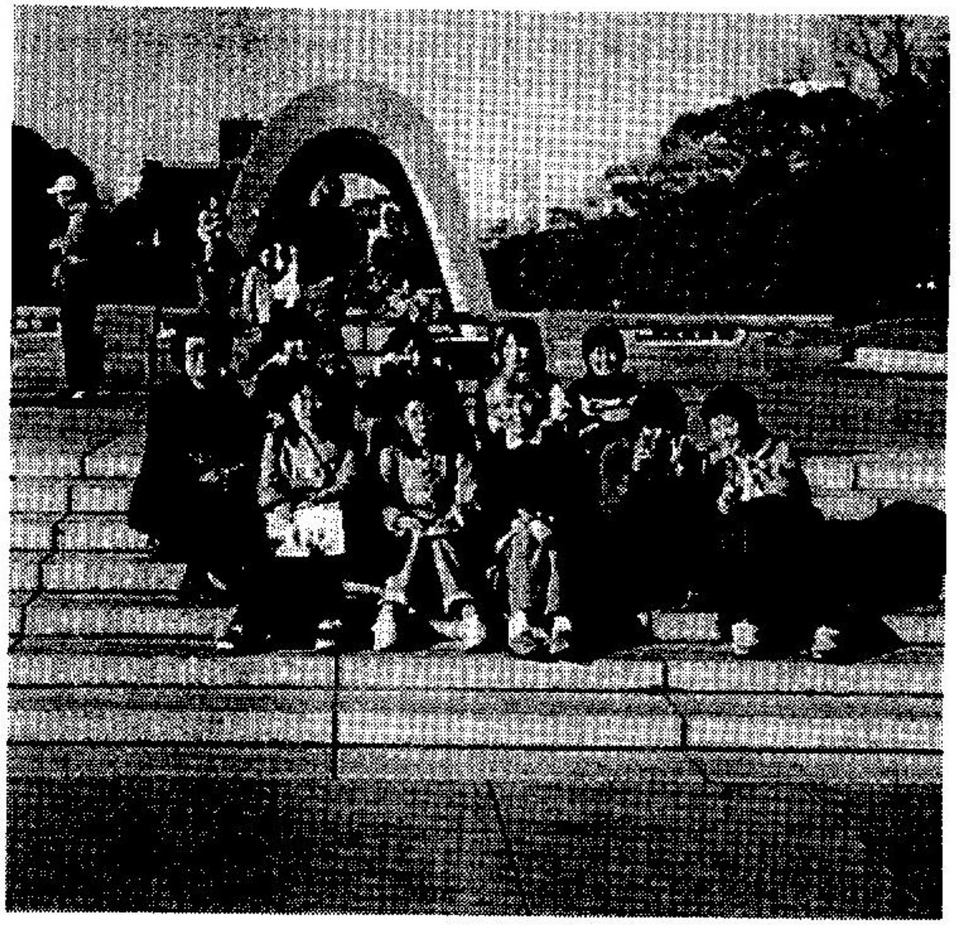
それを守ってくれたのはお母さんです。また戦後進駐軍が広島に入ってくると、お母さんは「娘をもとに戻せ」と米軍に向かって日本語で抗議をいつもしていたそうです。
1952年、原爆の威力を調べに来たノーマン・カーズンという新聞記者の目にとまった山岡さんは、1955年ニューヨークのMtサイナイ病院で、ヤケドの手術をしてもらうため、渡米しました。そこで27回も手術をしたそうです。

私は最初、アメリカが私をこんなにしたのだから治してもらうのは当然と思っていたの。でも私を泊めてくれていたクェーカー教徒のアメリカ人はそんな私に"I' m sorry"と言ってくれたのヨ。悪いのはアメリカ人じゃないんだ、戦争が悪いんだと思ったヨ。その人は私に何もしてないのに"I' sorry"と言ってくれたのヨ。
(山岡さんは以上のような話をいろいろなエピソードを交えながら話してくださいました)

私がこんな話をするのは、若い皆さんが平和の大事さをわかってほしいからだヨ。自分で判断する力を持ってほしい。物を大切にしてほしい。そしてハッキリものの言える人になってほしいんだヨ。私のお母さんが私の足と声だけで私を助けてくれて、私は今、皆さんに会えて、こんな話をすることが

[illegible]よ。覚えていてネ、お願いだから。
([illegible]、被爆者は手帳を持っていて医療費は無料なのだそうです。それを心ない人は「いいネ、医療費がかからなくて」と**言うそ**うです。すべてのものを失った人達にこんな言葉をか**ける人がい**るとは悲しいですね)

平和記念資料館は、原爆と被爆に関する様々な物と、現在**の[illegible]に**ついて展示してあります。日本だけでなく、多くの外**国の人も見学**に来ていました。資料館の出口に近い所には世**界各国から訪**れた大統領や王女様やマザーテレサやダライ・**ラマといった**人達のメッセージが展示してあります。全部読**み切れない程の量**です。世界の代表者が原爆の悲惨さを目に**し、平和を望**みながら、いまだに平和が訪れないのは何故な**んでしょ**うか。



原爆死没者慰霊碑と平和の灯

最後にテレビ等でよく目にする「原爆死没者慰霊碑」を見ました。山岡さんはこれを埴輪といわれます。碑の形が墳埴のくらの形に似ているからだそうです。碑中には、被爆して今までに亡くなった方の名簿があります。毎年何千人かの人の名が足されていくそうです。
毎年8月6日午前8時15分からここで慰霊祭をします。ここからまっすぐに原爆ドームと平和の日が見えるのです。

過去を表わす原爆ドーム、現在を表わす慰霊碑、そして真中に燃える灯は未来です。平和の灯は世界中から核兵器がなくなるときまで燃え続けるのです。

その日はいつくるのでしょう。シニアスカウトが大人になるまでに？それとも皆が親になってその子供達の時代になってからでしょうか。皆で一日も早く赤く燃える火が消えてほしいと願いました。

(1日目の夜、夕食の後、中谷リーダーのお父様の知り合いの谷本さんが話をして下さいました。谷本さんは今年で78歳息子さんと奥様と三人でホテルまで出向いて下さり、お話ししてくださいました)

谷本さんのお話

私が被爆したのは、19歳のとき、爆心地から2.3キロの被服省という軍人さんの制服を作る所で働いていたときです。この日の仕事に出掛け、自分の席に着いたと同時に、一瞬目の前が光り、続いてドーンと爆弾が破裂しました。私は壁際にいたので助かったのですが、窓際にいた友達には失明した人もいます。どこにいたかで随分被害は異なりました。診断所は、治療を求める人でごった返しているのです。次から次へと人が来るのです。お母さんが赤ちゃんを抱えているのが印象的でした。赤ちゃんがお母さんの胸にしがみついているのです。後から来る人は、その人が見えていないように手で押しのけて行くのを見て、悲しかったです。

顔にヤケドを負った人は、真白な薬を塗られて、まるでお人形さんみたいに目や口を描く前の様な顔でした。

被爆後の市内のありさまは、とても口で表わせないほどで、川に入って死んでいる人など、「生き地獄」とはまさにこのことだと思いました。私の聞いた話では、息子さんを探しに行ったら、貯水タンクの中で死んでいたそうです。それでも、その人は「息子を見つけられて良かった。見つけられない人がたくさんいるのだから。」と言っています。私は夜に市内を歩いて脱出したから良かったけれど、昼間では恐くてとても歩けなかったと思います。戦後、被爆者手帳を申請することになるのですが、

これを取るにも、いつ、どこにいて、何をしていたか、細かく書類を書かなくてはなりません。おまけにそれを証明してくれる証人が必要なのです。ですから、家族が皆亡くなったりした人は、誰も証明してくれないので被爆者と認められないのです。

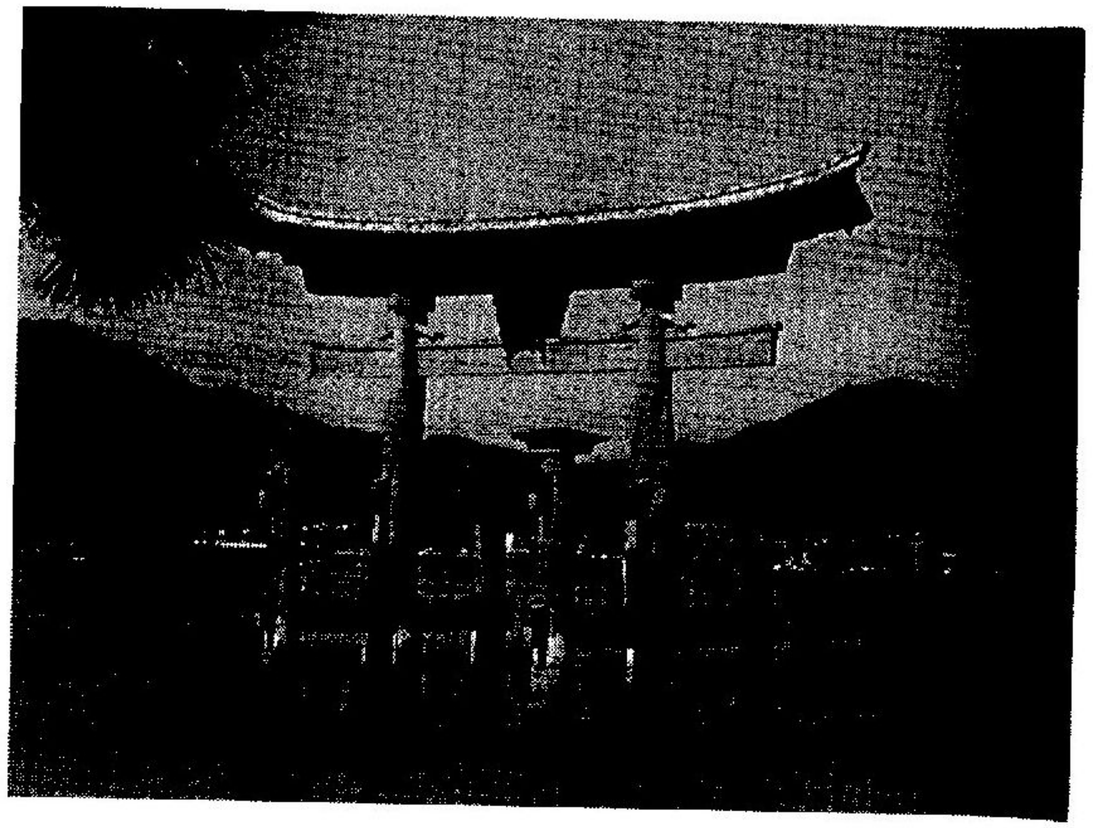
被爆した人は表面的には元気でいても放射能の後遺症がいつ出るかわからず、またガンにかかる確率も通常に比べ、非常に高いのです。常に不安を抱えて生きているのです。また、被爆者の家族は親が被爆者だからということで、結婚出来なかったりで、今迄黙って来た人もあるのですが、年とって健康に不安を感じるようになって、被爆者手帳を申請しようとしても回りの人が亡くなっていて、どうしようもないという事もあるのです。

谷本さんの息子さんの話

私が子供の頃、学校によく米軍の人が来て、私達を外車に乗せて診療所に連れて行かれました。チョコレートをもらったりして嬉しかったのですが、それが放射能の影響を調べるためとわかりました。今でも、調査依頼がありますが、行くのをためらっています。

相生橋を渡ったところに、本川小学校があります。そこでも、沢山の生徒が亡くなりました。私が子供の頃、学校の地下は閉鎖されていて、恐いところだったのですが、そこに沢山の資料があるのです。今の学校は昔の小学校の地下部分をそのままにして、その上に新しい校舎を創ってあります。地下は資料館になっているのです。皆さん、原爆資料館（平和記念資料館）だけでなく、本川小学校の資料館も是非見てください。
※谷本さんの息子さんの奥様のお母様も被爆者だったのですが、数年前に亡くなられたそうです。

（広島の街に住む人々の多くが、本当につらく悲しい体験を内に持ちながら生きていることが良くわかりました。谷本さんからスカウト一人一人に心のこもったお菓子をいただきました。おいしかったです。感謝！）



２日目の午前中は世界文化遺産として有名な宮島へ行きました。霊南坂教会員で、今は仕事の関係で広島に住んでいらっしゃる中奥さんが、細かい計画を立ててくださったのです。計画は完璧で、短い時間を十分に活用し、お昼にはおいしい穴子丼まで（「上野」という店です！）食べて帰ってきました。（宮島に行くなら、と谷本さんご推薦のお店で紅葉まんじゅう買った人。おいしかったですね。）

中奥さんはホテルの耳より情報も教えて下さり、おかげで格安の価格で泊まって来ました。帰り道、市電の駅まで送って下さいました。原爆の後、75 年は草木も生えないと言われた広島で、翌年には芽を出したという柳の老木は、今年も芽吹いていて私たちを見送ってくれました。

東京から遠いため、下見に行くことができず不安でしたが、多くの方々のご協力により豊かな 2 日間を過ごすことができました。皆様、ありがとうございました。

シニアリーダー　古谷　久代

スカウトの感想

山岡さんの話を伺って

外にいたので、大変だったのがわかった。白い服が大丈夫だったのが驚いた。腕の中に、ガラスがあったのに驚いた。

段木 真魚

戦争の中で家族が離ればなれになることなり、それぞれの戦いもある中、お互い助け合い支え合ってるいるんだと思いました。　原爆とは、人々を滅ぼす他に、絶望に陥らせることが出来ると思います。そして、山岡さんも言っておられましたが、見えない放射能は心の傷を作るのも事実です。その時苦しむのはもちろん、その後苦しむ方がとても多いと考えました。

小内 一子

山岡さんは、私と同い年の時に被爆にあったと聞き、想像できませんでした。もし自分もそこにいたらと思うと、すごく怖いと思いました。「お母さんがいなければ、私はいない」と聞いて、原爆が落ちてきてすごい危ない場所にも関わらず、娘の山岡さんを捜してくれたのは、すごいなぁと思いました。　それに大やけどを負ったにも関わらず、そのせいでいじめにもあったと聞き、すごい人生を送ってきたんだと感じました。原爆が「ピカドン」というのは聞いたことがありましたが、ブルーと黄金の色だったと聞き、びっくりしました。今の私には、とても想像がつかないけれど、山岡さんの話を聞き、少しでも多く知ることができ、良かったです。

矢島 麻友子

なんだか怖かった。親の大切さがわかった。

平野 梨沙

中３で、仕事もしなければならないので外に出ていたため、大変だった。光ったとき、顔がふくれたのを感じた。死ぬと思っていた。偽りの情報を聞かされていた。

多田 暁

なんだかとても恐くなった。被爆した人たちの怒りや悲しみがわかった。というわけで、恐くて途中で話を聞きたくなくなった。命は大切だなと思った。

瀬川 紫穂

山岡さんは、谷本さんと違って、爆心地から800m離れた所で、外にいるときに被爆にあった。だけど谷本さんは、建物の中にいた時に原爆を体験した。同じ原爆にあった人でも場所によって被害が違うと思った。今、自分がいる場所でそういう出来事があったというのは、信じられないなぁと思った。

山岸 早李

谷本さんの話を伺って

谷本さんは19歳のときに原爆を体験したと聞き、19歳はどういう時なのかわからないけれど、山岡さんと谷本さんと同じ話もありましたが、体験した場所の違いのせいか、話が少し違っていて、でも2人に共通することは、「地獄だった」言っていました。それを聞き、原爆の怖さが少しは学べたかなと思いました。

矢島 麻友子

山岡さんの話とはだいぶ違っていた。命は大切だと思う。

平野 梨沙

仕事で軍事工業に行っていて、椅子に座った途端に光った。壁によって遮られ、谷本さんは助かった。同じ部屋の人も、光を浴びた人は失明した。まわりは生き地獄だった。皮膚が向け、全身をひどいやけどで覆われていた。

多田 暁

とてもリアルですごく恐かった。山岡さんと年が違うだけで話の内容が少し変わった。命は大切だなと思った。

瀬川 紫穂

戦争とは

戦争で一番大切なことは、必ず人が亡くなことです。砂漠や草原など、人の住まないような所で戦争が起これば死人が出ないし、被害も少ないかもしれないと考えられるけど、それはないと思います。
どんな場所でも、戦争になるところは生活をしている人がいるのです。それが砂漠でも、そこを生活の場にしている人はいるはずです。逆に言うと、人の生活と全く関係ない所に攻撃するのはあまり意味がないと言えます。敵に打撃を与えるために攻撃するのだから、人の生活と関係のない所への攻撃はしないと思います。軍事施設でも人は暮らしたり働いているのです。つまり、戦争は「人を殺して、生活を破壊すること」だと思います。

小内 一子

日清戦争、日露戦争、と日本の戦争の歴史は短いようで長い。日清戦争より、ずっと勝ち続けていた日本は良い気になり、米・パールハーバーを攻撃。第二次世界大戦が始まる。しかし、一気に形勢逆転。アメリカは戦争を終わらすために広島に原爆を落とした。

笠川 奈美

戦争は、もう二度とやってはいけないと思います。人が人の命を奪う権利などないのに、自分が住む国のために命を落とすなんて私から考えてもおかしいと思います。山岡さんも戦争をした国ではなく、戦争を恨んでいると言っていました。世界で戦争の話が出てきていて、どうして同じ地球に住んでいるのに、人同士で戦うのか・・・おかしいと思います。どうかこの地球から、戦争という言葉が消えれば良いと思いました。

矢島 麻友子

意味のないもの
心のないもの
すべてにおいて私たちに降り掛かる災害
人工的に起こる
人と人が殺し合う
ひどいもの
命を軽く見ているもの
責任のない判断
怒り
そして
人間への不信感

段木 真魚

人を傷つけるだけのものだと思う
それは悲しみ以外の何でもないと思う

平野 梨沙

人を認められたなくなり、人を許せなり人を憎む様になり命を命として見ない時に起きること。冷静に心を大きくもてばそんな考えーカケラもでないというようなあほらしい考え。平和をけがす事をバカと思わぬ人々の集まりが起こす。一言で言うならば、「負」そのものだと思った。

多田 暁

資料館では、残酷な写真や当時の物がたくさんあって驚いた。差別をされていた被爆者とかは、本当にかわいそうでだけど、日本も他の国に対しては、同じようなひどい残虐なことをしたのもあるし、お互い様なのかぁと思った。だから結局は、世界の中で、日本はいい、アメリカは悪いとかはないし、平和になるためには互い、世界が協力し合ってたらいいと思う。

山岸 早李

原爆とは

1945年（昭和20年）8月6日 AM 8:15　に広島にアメリカ軍から落とされた原子爆弾。世界で初めて落とされた。広島には軍隊、軍事施設、工場が密集していたから狙われた。爆心地から3km以内の建物は90%、全焼または全壊した。爆発の時、爆発点の温度は、摂氏100万度を超えた。その周辺の温度は、摂氏3000～4000度になった。(鉄が溶ける温度は摂氏1536度)

笠川 奈美

原爆１つで、大勢の命があっと言う間に奪われ、恐ろしいものだと感じました。「ピカドン」と聞いたら、なんかそんなに怖さを感じませんが、２人の話を聞き、「ピカドン」の「ピカ」がどんだけ強い光で「ドン」でどれだけの命が減ったのかと思うと、「ピカドン」という言葉は、すごく怖いと思いました。

矢島 麻友子

恐ろしいもの　　壊すもの
必要のない物　　命を奪うもの
美を奪うもの　　歌を奪うもの
観を奪うもの　　心を傷つけるもの
あってはならないもの
・・・あとに残る憎しみと悲しみと屈折。

段木 真魚

命１つ１つはとても大切だけど、原爆は命を大切にはしていない。原爆は人を悲しみにつき落とすだけのもので、決して使ってはいけないんだと思う。

平野 梨沙

あってはならないものであり、決して使用してはならないもの。人命を奪うためだけに作り出された負の感情のかたまり一言で表せば、死。そのものだと思った。

多田 暁

人を殺すための兵器。
人々に怒りと悲しみを与えるもの。恐ろしいもの。

瀬川 紫穂

平和とは

平和とは、物でない状態です。物ではないので、どこかに保管したりはできないし、その場の移り変わり（時の変化）に対応しなければなりません。そして、初めからあるものではなく、作り上げ、築き上げるです。今、平和なら、平和を引き継いでいき、平和でなければ平和を作る！のが、私の考えです（でも簡単には作れない）。

小内　一子

「平和」と言っても、自分にとっての平和が世界平和という訳ではない。「隣人を自分の様に愛しなさい」これこそ平和の本随だと思う。

笠川　奈美

戦争の起こらないことで、少しは平和になれるかなぁと思いました。

矢島　麻友子

人間が人間であることを覚える
すべてにおいて相手の立場、自分の立場を考える
武力を消す　　愛するも者のそばにいること
すべて平等であること　　悲しいことを忘れないこと

段木　真魚

みんなが幸せに暮らすことだと思う
そして過去にあったことを後生に伝えていくことだと思う

平野　梨沙

お金が余るでもなく不足するでもなく、時間に追われるでもなく、暇でもなく両親又は身近な保護者（頼れる人、認められる人）がいて、うえるでもなく、余すまでもなく馬鹿みたいにほめちぎられてるわけでもなく、怒られすぎるのでもなく、何かから隠れ、怯えるでもなく何かを脅し、恐がらせるでもない、平凡である１日を楽しすぎず、苦しすぎず、平凡に過ごせ、また、ときおり少々驚く事もあり、それをゆっくりとさらりと乗り越えてゆくような日々であり、人生であり、人々であり、国であり、世界である。

多田　暁

争いのない時のこと
武力が消えること
安心して生きていけること

瀬川　紫穂

平和とは

平和とは、物でない状態です。物ではないので、どこかに保管したりはできないし、その場の移り変わり（時の変化）に対応しなければなりません。そして、初めからあるものではなく、作り上げ、築き上げるです。今、平和なら、平和を引き継いでいき、平和でなければ平和を作る！のが、私の考えです（でも簡単には作れない）。

小内 一子

「平和」と言っても、自分にとっての平和が世界平和という訳ではない。「隣人を自分の様に愛しなさい」これこそ平和の本随だと思う。

笠川 奈美

戦争の起こらないことで、少しは平和になれるかなぁと思いました。

矢島 麻友子

人間が人間であることを覚える
すべてにおいて相手の立場、自分の立場を考える
武力を消す　　愛するも者のそばにいること
すべて平等であること　　悲しいことを忘れないこと

段木 真魚

みんなが幸せに暮らすことだと思う
そして過去にあったことを後生に伝えていくことだと思う

平野 梨沙

お金が余るでもなく不足するでもなく、時間に追われるでもなく、暇でもなく両親又は身近な保護者（頼れる人、認められる人）がいて、うえるでもなく、余すまでもなく馬鹿みたいにほめちぎられてるわけでもなく、怒られすぎるのでもなく、何かから隠れ、怯えるでもなく何かを脅し、恐がらせるでもない、平凡である１日を楽しすぎず、苦しすぎず、平凡に過ごせ、また、ときおり少々驚く事もあり、それをゆっくりとさらりと乗り越えてゆくような日々であり、人生であり、人々であり、国であり、世界である。

多田 暁

争いのない時のこと
武力が消えること
安心して生きていけること

瀬川 紫穂

あとがき

私たちシニアは、一年間かけて平和について学んできました。４月の最初の集会で、今スカウトたちがどんなことに興味を持っているのかブレインストーミングを行った結果、みんなの口から「平和」を願う意見が多々出てきたことに嬉しく思い、一年間かけて平和について学ぼうということになりました。
集会では、戦争のことについて学んだり、いじめについて被害者側や加害者側の立場になって色々と討論したりましました。夏キャンプでは難民キャンプを行い、実際の難民の暮らしを身をもって体験し更に理解を深めました。

そして春キャンプ広島。４月の頃から広島原爆ドームに行きたいというスカウトの意見が多く、せっかく一年間平和について学んできたのだからその締めくくりとしてみんなの目で実際に触れてもらいたい！ということで、例年とは違った形での春キャンプになりました。
広島に着くまでの新幹線は本当に楽しい旅行気分でワイワイしていました。けれどいざ原爆ドームに着くとスカウトたちは真剣な表情で見学していました。山岡さん谷本さんのお話や展示物、どれも貴重な体験でした。見学してる際も辛くてその場に居られないような光景も多々ありました。しかしスカウトたちは思い思いにそこから色んなことを感じ取り、心に刻んでいったことと思います。みんなのまとめを見てもらえれば分かると思いますが、今回広島に行って本当に良かったと思います。普段の生活からは気がつかないけれど、みんなの平和を思う気持ちというのが素直にこのまとめに表れていると思います。

最後に、今回広島に行ったことで保護者の皆様に色々とご迷惑をかけてしまった事、お詫び申し上げます。しかし、それ以上の物がスカウト自身の心に残ったと思います。今後の学校生活・スカウト生活においてもこういった考えを忘れず活かしていって欲しいと思います。

シニア正リーダー　中谷　純子